てんでねっと

連載69回

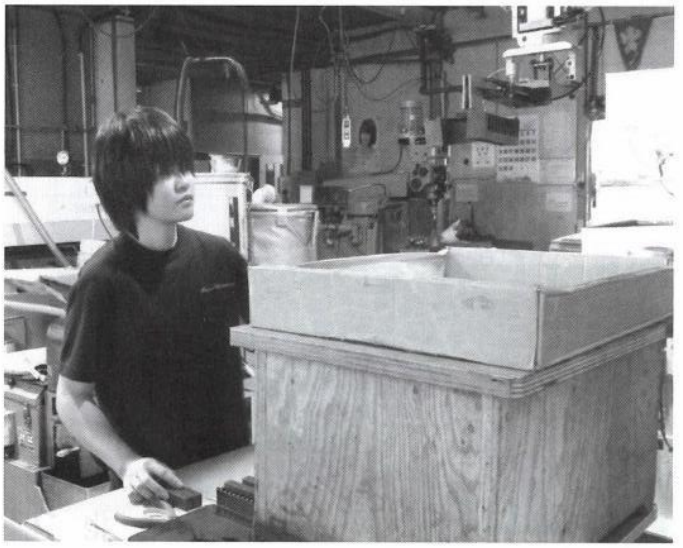
得意なことをみつける働き方

学校卒業後、働くイメージを持てる方はどの位いるでしょうか？得意なことをいかして働く20代の女性に会ってきました。

彼女は中野市にある『株式会社ミクロ化学』で手先の器用さをいかし、プラスチックの検査や成形を担当しています。入社して3年たった今、組立作業の速さは、社内でナンバーワンにまで成長したそうです。今まで経験のない同時作業も悪戦苦闘しながら、ご自身で作業効率を考えているとのこと。さらに作業のポイントや注意点、手順など細かくメモ帳に記録するなど努力を積み重ねてきたこともあり、みなさんから信頼され自信につながっているようでした。

初めは働くことをイメージできず「就職なんて考えなかった」と言います。就労移行支援事業所で「自信が持てること、苦手なところを仕事でいかせること、配慮してもらうと良いこと」などスタッフと数年間実践してきたそうです。そこでたくさんの経験を積み、得意な事を知り、ほめられ「仕事が楽しい」「ここで就職したい」という気持ちになったとのこと。

彼女は幼ない頃から耳の聞こえが困難なため、独自の工夫で生活してきました。一般的には幼少期から児童期に助詞や副詞の学習をし、あいまいな表現も学びますが、先天性の難聴になるとそれらは十分でなく、表現やことばの受け取り方にも支障がでます。また聞こえ具合や補聴器の不具合は、社会生活や仕事に大きく影響するため、配慮や周囲の気づきも必要になります。会社では、あいまいな表現を避け「ダメなこと」「ほめること」は分かりやすく伝え、伝達に工夫されているそうです。



彼女は自分を知り、会社でしか経験できないことを学び、そして努力する。「社会人」として様々な面で自信をつけています。「強み」「苦手」を知るということは自分を知ることであり、誰もが就業生活を続ける上でとても大切なことと感じました。

雇用支援ネットワーク部会員
坂東絵理